

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 203号

2019年3月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (3)

第3講 信者生活第60年・伝道者生活第30年所感

内村鑑三先生から学んだ5つの点

私はいつも申し上げる通り、内村鑑三先生から学生時代に福音を聞かせて頂きました。そういう関係で私の福音の理解は、内村先生の理解を通して聖書を知るところに従っているわけでございますので、本日はこの記念の所感といたしまして、内村鑑三先生から学びました5つの点につきまして所感を申し上げたいと思います。

第1の点は、内村先生が「自分の信仰は一つの文章、簡単な文章で言い表せると、そうならなければ力にならない」ということを仰せになりました。

私の一文、信仰の一文を申し上げます。「生きれば称名、死ねば天国」であります。もう一度、「生きれば称名」、救い主の名を呼ぶこと、わが主イエスよと、「死ねば天国」であります。

その時の喜び、言葉をもって述ぶべからず

これをもう少し引き伸ばしますと「生きらば称名、このままで、目の前の義務をなし、死ねば天国、キリストに迎えらる。その時の喜びは、言葉をもって述ぶべからず」と、これが引き伸ばした私の信仰の告白であります。…この「生きらば称名、このままで」、「このままで」という副詞は、「称名する」という方にも掛かりますし、「目の前の義務をなす」という、これにも掛かります。このままでなす。気張ることも必要なし、このままで目の前のなすべきことをなす。「称名する」という方は、これはロマ書 10 章 13 節によっておりますし、「目の前の務めをなす」という方は、ロマ書の 12 章 3 節から 8 節に根拠を持っているわけであります。

それから「死ねば天国、キリストに迎えらる」というのは、これはヨハネ伝 14 章 3 節に根拠を持っているのでありまして、我々はこの世を終わればキリストがお迎えに来て下さって、キリストの国に迎えられます。このことがいかに幸いなことであるか、いかにこれが喜ばしいことであるかということは、これは天国へ行ったときに私は分かることであるのでありまして、現在は、我々はキリストが迎えに来て下さることを、待ち望むのであります

聖霊の結ぶ実

われわれは、信仰、信仰と申しておりますけれども、我々はそのキリスト教信仰によって、我々の日々の生活がどれだけ力づけられておるか。パウロがガラテヤ書において「聖霊の結ぶ実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」と申しましたが、我々の生活において、心がこの聖霊の実をどれだけ持っているかということは、各自それは反省する必要があると思います。これが第1であります。

内村先生の最期のお言葉

第2は、内村先生の最期の亡くなる前のお言葉であります。昭和5年3月28日に先生はお亡くなりになりましたが、その3月のある日、九州から先生の弟子が先生を訪問いたしまして、そして先生の病気を御見舞いした。その日先生がご気分が良かったので、弟子にお会いになりました。そしてその弟子が申し上げるのに、「お見受けするところ、先生は御重体だと、じきにお隠れになるだろうと、どうぞ先生、最期のご教訓を頂きたい、先生のキリスト教を1分で話してもらいたい」と言ったそうであります。先生はおもむろに「主イエス・キリストを見上げよ」と。「この主イエス・キリストは、十字架に架かり、復活し、再臨なさる主イエス・キリストである」とこう仰せになったそうであります。そうですから最後、先生の信仰を1分で言ってくれと言われたときに先生は、信仰のお話もなさらず、望みのお話もなさらずして、愛のお話もなさらずして、「主を見上げよ」とおっしゃった。

主を見上げよ

最期の「主を見上げよ」と死ぬ前におっしゃったのは、これは我々の信仰、我々の心の状態と、こういうことを信仰によって救われると言うけれども、われわれの心の状態、行ないの状態というのは、いつも妄念によって動いているのであるから、我々として救いに入るべき唯一の方法は、主を見上げることであるという、この信仰も行ないもすべてを含んだ、いわゆる全体を一言で言われた「見上げる」でありまして、先生のおっしゃる深い意味が最近まで分かりませんでした。私はこの70の年に、称名のことが救いの条件になっていることに気が付きました。以来、先生の主を見上げるということが、これは一つの妙行として、こうして見上げる。こういうふうにする、こう見上げる。これが私は先生の遺訓であると思います。これは無教会の信者の方々も、この内村先生の「見上げる」と言われた深い意味についてご理解なさっている方が、あるいは少ないかもしれないと思うのであります。これが第2の点であります。

君たちの臨終のときに間に合う

第3の点は、私は先生の話をお聴きしているうちに、先生が、君たちは私が今ここで十字架の贖いの話をしているが、分からんであろう、分からんでもよろしい、覚えておけ、これは君たちが臨終のとき、死ぬときにこれが間に合う、だからこれを覚えておけというふうなことをおっしゃったことを私は覚えている。

われわれは十字架の贖いということは、現在のわれわれに関係ないように思いますから、何遍聴きましても馬耳東風と申しますか、何かわれわれの生活、信仰生活と関係ないことと思ってしまうか、か聴いておられますけれど、いよいよ死ぬとき、我々が臨終のときになるとき、我々の信仰、我々の行ないによらない、イエス・キリストの十字架の贖いのゆえに我々は救われて天国へ行き、キリストが迎えに来て下さるということ、これを知っておくということは、これはキリスト教において、もうこれほど大事なことはない。世の中に、いよいよ死ぬときに力になるという、そういうものほど大切なものはない。

死ぬときに役に立つものを宗教という

内村先生が、君たちは分からんでもよろしい、ぼやぼや聞いていてもいい、覚えておれ、死ぬときに間に合う。私はこの死ぬ時に間に合う、臨終のときに間に合うというものが、私はこれが宗教だと思ふ。これが宗教です。

…そうでありますので、死ぬときに役立つような、そういうものを宗教という。そして、死ぬときに役立つというそのことが、我々現在と無関係に思っておりますけれど、そうではない。現在の我々の悲しみ、苦しみのときに、それが役に立つ。やってみたまえ！ 主の名を呼ぶことを。自分の現在の、この世の達者なときの悲しみ、苦しみに役立つ。その時に役立たないようなものだったら、死ぬときも役立たないですよ。我々は宗教といったら死ぬときのように思っていますけれど、本当に死ぬ時に役に立つものは、現在の悲しみ、苦しみに勝つ力を持っている。それを宗教という。

自分の言葉で聖書の解釈を書け

第4は、内村先生はこういうことをおっしゃった。「信者になって聖霊を頂いたら、自分で聖書の続きを書くようにならないといかん」と言われた。この意味は、この間も兄弟からお話があったのですが、黙示録の最後に、この聖書には一言一句加えてもいかんし、一言一句も引いてもいかんと書いてある。

それに内村先生が、言ってみたら、使徒行伝の続きを書くようにならないといけないということになったら、これは黙示録の聖書の大精神と非常に反しますが、何も聖書に新しき真理を加え、聖書の真理を引いてしまうというのではなしに、聖書の真理をより明らかにするために、自分の言葉で自分の聖書の真理を表すようにという意図であろうと思う。私は、内村先生の意味は、自分で、自分の言葉で聖書の解釈を書けと、そういう意味であると思います。

ロマ書 10 章 13 節の注釈

私は先生の御遺訓によりまして、3カ所の聖書の文句に注釈を加えたい。

第 1、ロマ書 10 章 13 節。これは「主の名を呼び求める者は、救われる」とありますが、その「主の名を呼ぶ」というところへ、私はその意味をはっきりさせるために「このままで」という副詞を付け加えたい。…私の「このままで」という意味は、"just as I am" から来ている。このままでやる。

これは主の名を呼ぶときのみならず、自分の日々の義務を尽くす、日々の仕事をするときもこのままでいい。腹が立ったまま、むしゃくしゃしたままでいい。自分のなすべきことをなしたらいい。勤め人は、上司から言われて腹が立ってけんかしたい、そのとき腹が立ったままで自分の命ぜられた仕事をしたらいい。そのままで自分の義務を尽くしたらいい。私はそうしている。私は日曜日の朝、教会へ来ること、これが私の務めですから、日曜日の朝礼拝に出ること。これは、自分がうるさいなと思ったら、うるさいという心のままでここへ出ている。私は、毎日気持ち良い日だけではないですよ。このままでいい。これが 13 節の称えるという意味です。

歎異抄と一枚起請文

浄土宗、浄土真宗に興味のある方もございますから、「歎異抄」と「一枚起請文」とに触れたいと思います。

私は称名の理解ができてから、「歎異抄」の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、よき人の仰せを被ぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり」という、あの「歎異抄」の有名な言葉が有りますが、親鸞におきては「信ずるほかに、別の子細なきなり」というところを、あそこを私は「称名をするよりほかに、別の子細なきなり」と、私の説明は、「信じる」という字を「称名」という字に替えたい。

もう一つ、法然上人「一枚起請文」の「ただ三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏と申して往生するぞと思ふうちにこもり候ふなり」という、あの「思ふうちにこもり候ふ」という「思ふうちに」というのを、「ただし三心四修と申すことの候は、皆ただ称名するうちにこもる」と、そういうふうに私は注釈を加えたいと思います。

これは、「歎異抄」からは「信じる」という字を取り、「一枚起請文」から「思ううちに」という、自分で思うというこの思うという

字を取ってしまった。両方とも「称名」にしてしまった。これが、お二人の日本の大指導者のお言葉に対する、私の小さな解釈であります。

それから、聖書の一つの場所、ロマ書 10 章 13 節、これは私の命の言葉ですから、10 章 13 節は、ここに私のすべてがかかっている。私のすべてはここに掛かっている。私のキリスト教信仰のすべてが、ロマ書 10 章 13 節にかかっている。

ヨハネ伝 14 章 3 節

もう一つの場所は、ヨハネ伝 14 章の 3 節。すなわち、キリストが「私が所を備えたら、また来て、お前を迎えて、私のいる所に連れて行ってやる」と書いてある。キリストが迎えに来ることが書いてある。この言葉、これほどありがたい言葉は聖書の外に無いかも知らんですよ。ヨハネ伝 14 章 3 節、これが死ぬときに役に立ちますよ！　こういうすごい、喜びと平安に満ちた、こんなすごい言葉を、もっと教会で先生が教えてくれませんか。

そしてこのヨハネ伝 14 章 3 節に、私は注解を加えまして、「そのときの喜び、言葉をもって述ぶべからず」、これを私が注解として付け加えたい。

信仰による義人は、称名によって生きる

それから三つ目、ロマ書 1 章 17 節後半、「義人は信仰によって生きる」という言葉。内村先生は「信仰による義人は、信仰によって生きる」と言われた。内村先生が「信仰による義人は、信仰によって生きる」と注釈なさいましたが、私は「信仰による義人は、称名によって生きる」。信仰という字を称名という字に代えて、内村先生の「信仰による義人は、信仰によって生きる」というのを「信仰による義人は、称名によって生きる」。

その理由は、ただ称名が易いからというではなしに、これは一つは称名ということが救いの条件となっている。

真理は体験して分かる

第5には、内村先生は、「真理というものは考えただけでは分らない。実行してみて自分が体験してみて初めて真理は分かる」と言われた。私は誠に先生のこの言葉を思い出しまして、例えば散歩することとは健康にいいという真理、私はこれは真理だと思いますが、散歩というものが、歩くということが健康にいいというこの真理も、実行してみなければわからない。…真理は自分が経験しなければ分からない。自分が福音を経験しなければ、人に言っても分かりませんよ。自分が経験してこそ「小西はいつも称名している。いつ会っても静かな、平安な心を持っているな」、そういうふうになりたい。パウロ先生は60過ぎにしてイスパニアへ伝道しようと思っいらっしゃいましたが、私は今日から、私の体でまだ福音が行き渡っていないところへ、自分の体へ伝道してみたい。そしてこの自分の体を、福音によって照らすものとして頂きたい。そして続いて私の家庭に福音の光を分け与えたい。

伝教大師が、「一隅を照らすもの、これ国宝」と仰せになった。私も伝教大師の遺風を学んで、自分自身のこの一隅を照らし、自分の家庭の一隅を照らすものになりたい。